

フォンタネッラート (Fontanellato)

先週に引き続き、パルマ近郊の城を訪ねました。実は、先週のトッレキアラを訪ねたときに、フォンタネッラートには、パルマの美術館の一番の目玉、あの「トルコの女奴隷」を描いたパルマ出身の16世紀の画家、パルミジャニーノのフレスコ画があるとの情報がありましたので、どうしても見に行きたくなってしまいました。それに加えて、この日(5月1日)は地下鉄の始発が7時過ぎと遅くなるので、朝早い列車でジェノヴァの先に行くことができないことも大きな理由です。

この日は、心配していた通り、単なる祝日ではなく、バスの本数も大幅に減らされています。パルマの駅前からのバスは、ほぼ全滅でした。仕方なく、先週と同様にタクシーを利用しました。もちろん、この日は、戻りのバスもないので、同じ運ちゃんに迎えに来るように交渉し、戻りの足も確保しておきました。この日の運ちゃんは、若い人で英語もOKで、話は早くつきました。パルマからフィデレンツァの北にあるフォンタネッラートまでは約18キロ、タクシーは片道30ユーロ強でした。フォンタネッラートは、パルマ・ピアチェンツァ周辺のお城で推薦されているところですので観光地です。特に、イタリアでは有名なパルミジャニーノのフレスコ画があるためなのか、この日は、城の周りには街頭市も出ていて、車も旧市街から締め出され、おまけに観光日和で、もちろん車で来たのでしょうか、結構、大勢の観光客が来ていました。お城の周りの小さな区域だけが旧市街で、フォンタネッラートの街の中にある門(ソプラ門、15世紀)をくぐると旧市街となります。



この城は、ロッカ・サンヴィッターレと言います。フォンタネッラートは、サンヴィッターレ家が、14世紀にミラノのヴィスコンティ家からこの地を与えられて、15世紀に、それ以前の領主が12世

紀に建てた城を戦いと住居の両方に適するように拡張し、この城を建て居城としました。その後、いろいろと周囲の環境は変わりましたが、1948年に城をフォンタネッラートの街に売り払うまで、サンヴィッターレ家はここを居城としていたとのこと。従って、この城は、戦争による被害もなく、多少の改装などはあったものの、ほぼ、15世紀に建てられたままの姿で残されています。



城の中は、数ある部屋の中の1,2階にある11部屋を現在公開しています。1時間おきに、ガイド付きのツアーがあり、そのツアーに加わらないと城の中の見学は出来ません。ツアーは満員で人数は30人ほど、城の中の各部屋にこれ以上は入れないくらいの観光客数でした。しかし、私以外は全員がイタリア人、当然ガイドはイタリア語ですので聞いていても何もわかりません。でも、ちゃんとガイドのコースに従った英語の資料を渡してくれて、多分、説明の内容は他のイタリア人よりもよく理解できたのではないかと思います。11部屋の中の1部屋の天井に、1524年、パルミジャーノの20歳の時に描いたフレスコ画、“ダイアナとアクタエオンの神話”があるのです。このフレスコ画だけは、ちゃんと修復されていて、きれいに照明が充てられていて、とても素晴らしいものでした。残念ながら、このフレスコ画に限らず、城の内部は全面的に写真撮影禁止でしたので写真は撮っていません（でも、絵葉書を買ってきました）。その他の10室も、14世紀から20世紀までに使われた家具や調度品、ビリヤード台、兵器、彫刻、壁にはフレスコ画と絵画等、があります。ジェノヴァやトリノにあるお金持ちの宮殿ではありませんので、キンキラキンではありませんが、品の良いシックな感じは日本人好みかもしれません。それに、4人の若い女性が代わる代わるガイドしてくれますので、非常に楽しめました。入場料の7ユーロの価値は十分以上にあります。





真ん中の段の2枚の写真は絵葉書を撮影したものです。

小さな旧市街の中には、城のほかにも、15世紀に建てられたソプラ門とサンヴィッターレ家の厩舎があります。ソプラ門は、上記のように旧市街の入口です。城の直ぐ前にある厩舎は残念ながら公開されていませんが、本当に厩舎だったのだろうかと思うくらいに、立派で宮殿のようです。それに、厩舎にはきれいな庭園が隣接しています。きっと、飼い馬を雇用人以上に大事にしていたのでしょうね。当然ながら、旧市街には教会もあります。16世紀に建てられたレンガ造りのゴシック建築、サンタ・クローチェ教会が城の直ぐ脇にあります。教会はドアが閉じていて中を見る事が出来ませんが、この中にもフレスコ画があるそうです。また、18世紀に建てられた礼拝堂もその近くにありま。これら全ては城の周りにあり、全てがこの城を中心にして500~700年ほとんど変わらずに歩んできた街なのです。



最近はタクシーを使うことを覚えてしまいましたので、バスがなくても気にならなくなっていました。もちろん、バスがあればバスを使うのですが、ちょうど良い時間にバスがないときでも、慌てることなくタクシーで行けばいいや、と考えてしまいます。タクシーで気をつけなくてはいけないのは、戻りの足を如何にして確保するかです。バスがあれば良いのですが、バスがないと、また、タクシーとなります。しかし、最近では、電話してもイタリア語のコンピューターによる対応が多くて、イタリア語会話が出来なければタクシーを呼ぶことが出来ません。従って、カフェやレストランに入って、そこで呼んでもらわなければいけません。大抵、田舎の小さな街には、現地のタクシーなんてありませんから、近くの大きな街から呼ぶことになり、時間がかかるだけでなく割高になってしまいます。従って、今回は、行きに乗ったタクシーを降りるときに、運ちゃんと直接交渉して、迎えに来てもらうことにして、戻りの足を確保しました。料金も行きと戻りはほぼ同額でした。

ますます、裏技を覚えて、行動の枠が広がりそうです。イタリアの田舎の街には、所謂お宝がいっぱい潜んでいます。日本で言えば、田舎に小京都や小江戸がいっぱいあるのです。これからも、裏技を駆使して、こういった田舎のお宝を見に足を運びたいと思っています。